

コロナ禍での大学1年次生の学びの軌跡
—— 2020年度～21年度前期における
リモート授業「近現代史概論Ⅰ・Ⅱ」の記録 ——

Learning tracks of Kobe Gakuin University
first-year students during Covid-19 outbreak
—— The questionnaire survey about “an introduction to
modern-history I・II” taught by remote lectures
from 2020 through the first semester in 2021 ——

鵜飼 昌男

(要約)

コロナ禍の新入生に対して、リモート授業で行われた共通教育科目「近現代史概論Ⅰ・Ⅱ」での授業アンケート回答を概観し、受講生が感じた大学での学びに対するモチベーションの変化を跡づけ、リモート授業の改善点を学生側からの視点で明らかにした。また、回答の集計から浮かび上がった、20年度生と本年度入学生が抱えるコロナ禍の中での大学生活に対する考え方の違いにも言及した。

キーワード：リモート授業，コロナ禍の大学，学びに対するモチベーション，
授業アンケート

はじめに

変則的な対面・リモート授業や制限付きの登学による大学生生活は、1年半を経過してもまだ続きそうな気配である。昨年度4月、新入生へのガイダンスや科目履修作業の混乱は、教務委員会、危機管理委員会、教務グループや情報支援グループ、全学教育推進機構などの精力的で速やかな対処により、1ヶ月の遅れのみで新年度の授業を進めることができた。本報告を記すにあたって、まず関係者各位へのご努力に感謝を申し上げたい。

コロナ禍をきっかけに大学教育ではリモート授業を導入せざるを得なくなり、多くの教員や学生は初めてリモート授業の功罪を経験した。今後の大学教育ではコロナ禍の終息に関わらず、リモート授業が一つの柱として残るものと考えられる。具体的には、休講に対するオンデマンド録画の視聴による代替措置であり、教室での Zoom のチャット利用による双方向型授業、配慮を要する学生に対する授業機会の保障などが、最も有効な部分であろう。一方、リモート授業の持つ難点（特に講義系授業における受講生の孤立感など）に関する改善方法の共有は、あまり進んでいないのではないかと感じている。

本報告ではコロナ禍による全学的なリモート授業の1年間に対して、担当する共通教育高大接続分野科目「近現代史概論Ⅰ・Ⅱ」受講生の成績および授業改善アンケートの集計データを基に、当時の1年次生が感じた大学での学びを記録し、リモート授業の基礎的な改善に資するよう「覚え」を残すものである。対面授業とリモート授業が並存することが予想される大学教育に対して、全学的な教育環境の整備と教員が取り組むべき授業改善を検討するための一資料となれば幸いである。

1. 授業に関する基本情報

年度	科 目	キャンパス	曜日・時限	履修者数	欠席超過者数	受講継続率
2020年度 前期	近現代史概論Ⅰ①	KAC	月曜2限	161	13	87.0%
		KPC	火曜4限	98	8	84.7%
2020年度 後期	近現代史概論Ⅱ②	KAC	月曜2限	90	23	76.7%
		KPC	火曜1限	30	4	71.0%
2021年度 前期	近現代史概論Ⅰ③	KAC	月曜2限	183	40	78.1%
		KPC	火曜4限	55	12	78.2%

①全てA4サイズ7枚程度の講義録をPDF配信するオンデマンド型授業で行なった。学生は講義録を読み文中の設問4～5問に解答し、教材読後によって得られた各自の発見や質問などを800字以内でまとめ、返信することで授業への参加とした。資料配信は授業日の前日、課題提出期限は授業日から3日間とし、ネット環境不良等による提出遅れの場合は、大学の私のメールアドレスに送信することを指示した。最終回のみは、Zoomによるリアルタイム授業を行い、後期からのZoomまたは対面授業に備えながら後期の履修者を増やそうと考えたためである。課題提出状況不良の学生に対しては、6月下旬にdotCampusのメッセージ機能を通じて授業参加に関する注意喚起を行った。

②教室での対面授業に切り換わったが、リモート申請学生に対してはZoomでリアルタイム配信するハイブリッド型授業で行なった。教科書は使用せず、事前配信資料（A4 2枚）をdotCampusにアップし、授業概要と授業のポイントを事前に知らせることで理解度を上げようと考えた。学生には資料を持参または自宅で参照して受講することを指示し、受講後に各自の意見や質問などを800字以内でまとめ、対面授業ではあるが毎回1問の課題の解答と共にdotcampus経由で返信することで出席認定とした。これは前期のリモート授業実施において、学生の出欠確認が曖昧になるという点が指摘され、その対応に教員が苦勞したという話を聞いていたための措置である。事前資料の配信、課題提出の期限と遅れへの対応、課題提出状況不良の学生への注意喚起は前期と同様にした。ネット環境不良等によるZoomの不調者や欠席者には授業録画の視聴で対応した。また、図書館の利用が可能となったことをうけて、パワーポイントによるプレゼン画面の作成（20点配当）を特別課題とし、その講評を第13回目の授業で行った。

③4月当初の対面でのガイダンス実施後、緊急事態宣言をうけて受講者数を基準にリモートか否かが大学から指示された。KPC 4限は対面授業を行えたが、KAC 2限はリモート授業（リアルタイムZoom 4回、出張によりオンデマンド授業としたもの3回）となる。緊急事態宣言の解除をうけて6月21日から、KPC 4限は対面授業が復活したが、KAC 2限はリモート授業のままであった。この授業形態の差はやはり後述の成績面で現れている。パワーポイントによるプレゼン画面の作成課題は何とか実施でき、その講評を第14回目の授業で行った。今回も出席状況および課題内容の不良者に対しては、6月中旬にdotCampusのコースフィールド（掲示板）機能で全体的に注意喚起すると共に、個別にメッセージ機能を通じて授業参加に関する警告を伝えた。

2. 授業内容の概要

「近現代史概論Ⅰ・Ⅱ」は主に1年次生を対象としたもので、共通教育センターのカリキュラム改訂によって新設された高大接続分野の文系での中心科目である¹。前期配当の「近現代史概論Ⅰ」では、人文科学・社会科学の各学部での専門的な学びに進む前段階として、高校での世界史離れが進む入学生に西洋近現代史に関する基礎知識の不足を少しでも補い、歴史が暗記科目ではないと認識を改めさせることを第1の目的としている。

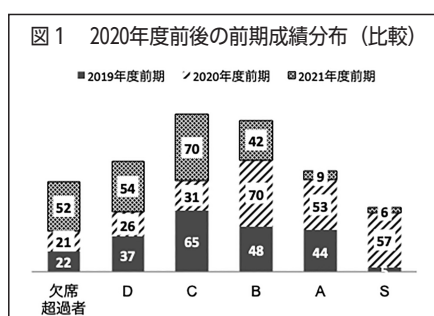
講義では以下の2点に留意して教案作成を行っている。①歴史事項の理解を通して、論理的・合理的な思考に親しむ。②欧米各国が抱える諸問題の歴史的背景を理解し、日本のグローバル化に対する各自の意見形成を図る。昨年度までは、大学での初年次教育の観点から、ノートテイクや自主的な学びの姿勢等「授業を受ける上での作法」に関しても適宜指導してきたが、2020年度は遠隔授業となったためこの部分は十分行えていない。

リモート授業となった2020年度前期は、私自身がZoom自体に不慣れであり本学の遠隔授業システムを使いこなす自信もなかったため、講義録の配信（A4紙7枚程度）を読ませ設問に答えるオンデマンド形式の授業とした。担当者として、学生の取り組みモチベーションを維持し、教材を読むだけの不満を減少させるためには、講義録の内容が最も重要になると考え、読み物風のスタイルに画像やグラフ、史料などを盛り込んだものとした。

内容には「学生が共感を持てる問い掛け」となるようなキャッチコピーを用意し、論理的・合理的な説明（講義録）を読むことで腑に落ちる経験を積ませることに留意した。設問は単純に用語知識を問うようなものとせず、ネットで検索して解答を自分の言葉で作るものや、事項の内容理解を自分の言葉で書き表すものを用意した²。

3. 成績概況

	受講者数	欠席超過者	D	C	B	A	S	単位取得率	GPA換算	評点平均
2019年度前期	221	22	37	65	48	44	5	73.3%	1.42	70.9
2020年度前期	258	21	26	31	70	53	57	89.0%	2.35	77.8
2020年度後期	120	27	24	19	16	19	15	77.5%	1.81	68.4
2021年度前期	233	52	54	70	42	9	6	70.2%	1.13	62.2



リモート授業に切り替わった2020年度前期を挟んで、従来までの大学生活であった2019年度とコロナ禍で2年目に入った2021年度の前期を成績区分別に見てみることにする（図1）。2020年度前期はオンデマンド授業が主体となったため、試験もプレゼン課題も出せないまま毎回の振り返りシートのみによる評価となったことから、全体的に成績が甘めになっている。

左の積み上げグラフで注目すべき点は、2021年度の成績分布である。いきなりリモート授業でスタートしたため教員、学生の双方に戸惑いの大きかった2020年度を特別な年度と考えるならば、2021年度の成績を比較する相手としてはコロナ前の2019年度が適当であろう。グラフでは実数を積み上げたが、2021年度と2019年度の履修者に占める各段階の%を一覧表にすると下のようになる。

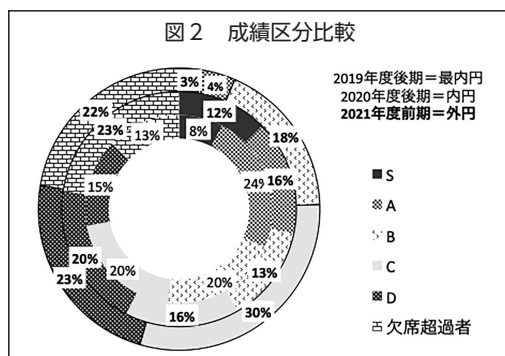
	欠席超過者	D	C	B	A	S	履修者数
2019年度前期	10.0%	16.7%	29.4%	21.7%	19.9%	2.3%	221
2020年度前期	8.1%	10.1%	12.0%	27.1%	20.5%	22.1%	258
2020年度後期	22.5%	20.0%	15.8%	13.3%	15.8%	12.5%	120
2021年度前期	22.3%	23.2%	30.0%	18.0%	3.9%	2.6%	233

2021年度前期ではコロナ禍前の2019年度前期と比較して欠席超過者が倍増し、単位不認定者も約20人（5%相当）増加していることに関しては、単に入学年度の違いとは言いつれないのではないか。なぜならば、リモートと対面の授業形態が混在した2020年度後期と2021年度前期の数字を比較すると、欠席超過者や成績不振者について同様な比率が見られるからである。2020年度入学生の大学生活や学びに対するモチベーションは、対面授業が可能となりキャンパスに集うことができるようになれば、コロナ前の状況に回復すると私

は考えていたが、2020年度後期の私の科目のアンケート数値は回復を示しておらず、単位を落とす者の割合が2倍、授業に参加してこない者の割合も2.8倍になっていた。そして、コロナ禍の中で入学生してきた21年度生の前期成績状況を、20年度後期の状況と比較すると、欠席超過者とD評価の者には同様な値が見られ、これらの値はコロナ前の19年度前期の同様な者の値より高くなっている（欠席超過者で12%、D評価者で約5%）。本学の入学生の内、コロナ禍によって大学で学ぶ意欲を低下させた者の割合が、例年よりおよそ17%（12% + 5%）増加したと考えられ、特に授業に参加してこない新入生の割合が倍増している点は、深刻な状況にあると受け止めるべきものである。

一方で、2021年度入学生は成績上位者（A評価）層が大きく減少していることが見て取れる。なぜこのような数字になるのでしょうか。2020年度入学生は大学入学後に期待していた大学生活を味わえなかったため、大学での学びやキャンパス生活に「飢え」を感じていた者の存在を、私は授業と毎回の授業の振り返りを通じて肌感覚で感じてきた。このような学生層が後期の登学と対面授業の再開に際して意欲を再起させ、後期の成績上位者（A）層を形成したのではないだろうか。

昨年度末に2020年度後期の成績報告を行った際には、コロナの影響がなかった2019年度の後期成績との比較を行い、欠席超過者と成績不振者の激増を指摘し、授業アンケートで「学びに対するモチベーションの低下」を回答した者が倍増していることと併せて、2020年度入学生の現状を次のように推測した。「彼らは明らかに例年のような1年次生の育ち方をして居らず、後期も学ぶモチベーションを低下させたまま成績不振に陥ってしまった学生が、例年の倍に達している。この状況は憂慮すべきである」と。そして、「2020年度入学生の集団全体に対するメンタル面でのケアを、入学時の追体験という形で実施する」ことを提案した。このような観測と動きは他大学でも行われ、2年次生を対象とした入学式を別途4月に行った大学もあった³。



このような2020年度前後期の状況を踏まえて2021年度前期の成績を見ると（図2），欠席超過者と成績不振者の多さ（合計45.5%）に比して成績上位者（A）層が極めて少なくなっていることは、コロナ前の状況や2020年度後期の状況とも異なるものである。高校3年生の時点でコロナ禍による休校とリモート授業の混乱に遭遇してきた2021年度生は、

大学入学時もダメージが回復しておらず、そこに再びリモート授業とならざるを得なかった大学生活に直面し、学ぶ意欲を減退させたのではないだろうか。21年度の本科目は、KACでの履修者数が178名であったため6月21日以降もリモートが続いたが、KPCは52名のため対面授業が再開された。この授業形態の違いも成績上位者数の比率においてリモートが続いたKACの割合を下げたものと思われる。【成績上位者（S～B）／履修継続者 KAC 22.2% KPC 32.1%】

2020年度生が本年度2年次生となって学んでいる状態とその成績はどのようなものになっているのかを、共通教育科目を担当している立場では知り得ないので、1年次生末で大学での学びに対して心配された実態がどのように変わっているのかを大学または学部は追跡調査する必要があると考える。一方で、高校3年生の時点でコロナ禍による休校とリモート授業の混乱に遭遇してきた2021年度生は、高校3年生の不満足な1年間に対する心の傷が回復しておらず、大学入学後も再び登学停止、リモート授業から始まった大学生活に直面し、学ぶ意欲を減退させたのではないだろうか。コロナ禍の影響を高校3年生で受けてきた2021年度入学生の前期末の成績状況について、本科目の受講者というサンプル資料ではあるが、昨年度末よりも危惧される数値が見られた。大学での学びのモチベーションに対するコロナ禍の心理的影響とは、今後どのように現れてくるのかを推測するため、授業アンケート結果の経年比較で探ってみることにする。

4. 授業アンケート結果からうかがわれるコロナ禍下での学びのモチベーションの変化

まず、私が独自に継続して行っている「授業アンケート」について簡単に説明する⁴。本学の共通教育センターでは2019年度のカリキュラム改正に反映させ、高大接続分野を新設した。私は受講生に対して前期後期の末に授業アンケートへの協力を伝え、初年次教育の在り方や講義内容の改善のために、アンケート回答のデータを参考に担当科目のブラッシュアップと入学生の現状把握に努めている。

アンケートでは回答率の高さを重視するため、授業を通じての人間関係ができたと思われる13回目か14回目の授業でアナウンスし、dotcampusに設けた質問に対して無記名で回答する形式をとっている。項目では、授業内容の難易度や授業進度に関するもののほかに、大学での学びに関する事柄や自由記述欄も設け、初年次科目を担当する教員として新入生の大学への適応度なども把握することを目指した。

	2019年度前期	2020年度前期	2020年度後期	2021年度前期
アンケート回答率	80.1%	86.1%	92.3%	68.3%

2020年度前期では、初めてづくしの4月から半年を終え、当時のコロナ第2波の状況から後期もリモート授業の可能性が高いことに備え、リモート授業＝Zoom授業と安直に考えず（Zoom授業さえしていれば免罪符のようなムードも見受けられる）、受講してきた側の学生の声を丁寧に拾い、リモート授業の質を一定のレベルにまで引き上げていかなければならないと考えた。アンケートの自由記述には、リモート授業の改善に資する基礎事項が散見されたので、以下に2020年度前期の授業アンケートの自由記述を中心にいくつかテーマに絞って検討し、今後のリモート授業改善のための覚えとしたい。

1) リモート授業のあり方について

資料配信のオンデマンド型授業に対する学生の率直な感想は、「レジュメやPDFの配布

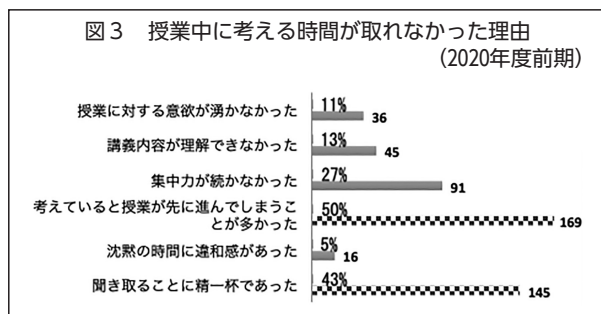
だけの授業ではやる気が全く起こらなかった。また、理解もあまりできなかった。先生の話があってこそだと思うので最悪 zoom を使用してほしいと感じた。」という趣旨のものが一番目についた。1 回生はキャンパスにも立ち入れず、大学生の実感がないままで授業を受けるという日々が、学習意欲を失わせ不満や孤独感を募らせていた。一方で、「講義資料やビデオ録画を後から確認することができたり、講義資料を授業中に見ながら自身のペースでメモを取れる点が、リモート授業を取り組みやすいものにしていてと感じる。」という学習面での利便性、通学費や通学時間の負担がないという生活面、そしてリアルタイムでない授業はマイペースが守れるなど、一概にリモート授業を否定していない現状もあることには些か驚かされた。

学生はキャンパスで教員との対話や友人と一緒に学ぶことを強く求めながら、一方でアルバイト時間や自分の自由時間を確保したいという思いもあるため、授業形態は対面でなければ「リアルタイムか、オンデマンドか」を問題にするようである。「資料を読んで話すだけの授業だったら、リアルタイムにせず各自で学習できるほうが、各々課題に取り組む時間や授業する時間を計画できるので、必要以上にリアルタイムはしないほうがいいと思った。」「zoom を使った授業でスライドに書いてあることを、90分延々としゃべられるのはとても苦痛であった。スライドに書いてあることだけを話すなら、資料を（自分で）読めば済む話なので。」という意見は、まさにこの点を表したものである⁵。

2) Zoom 授業での改善点について

Zoom によるリアルタイム授業においては、授業構成や教材の選定、スライド等の資料作成、そして何よりも姿の見えない PC 画面の向こうにいる学生に語りかける想像力とスキルが、教室での対面授業の場合よりも格段に教員に求められる。その上で、授業アンケート結果をもとに講義系 Zoom 授業のスタンダードレベルを考えてみたい。

まず、90分間という授業時間の持ち方である。講義系の Zoom 授業では、学生がひたすら PC 画面を見続け講義音声聞き取らなくてはいけないので、対面授業よりも疲労度は高くなる。アンケートでは、1 年次生が Zoom 授業における集中可能時間を 45分～60分と回答した者が 69% であった。



次に、PC 画面を見続け教員の講義を聞き取るという行動の中で、「授業内容や授業中に出された問いについて、授業を受けながら考えることができたか」をアンケートで質問してみたところ、1/3は考える余裕がなかったようである。問題は受

講生が考えることができなかった理由にある。上のグラフは想定される理由を示し、複数回答可として選んでもらった結果の集計である。上位2つの理由は聞くことと考えることの両立の難しさにあるため、学生は講義を聞く方にウエイトを置かざるを得ないという実

態を表している。Zoom 授業における教員側の改善すべき点は、ここにあると考える。画面共有を多用して聞かせる工夫を重ねても、学生が授業内容や教員からの問いかけに対して考えるためには、そのための静かな時間（所謂「間」というもの）を授業時間中に設けなければ、学生の学びを深めることはできない。集中できる時間のデータと考え合せて、学生の考える時間をどう差挟むのか、90分間での授業構成を再考することが改善案のベースとなろう。

3) 授業運営における留意事項

この度のコロナ禍で実施された全学的なりモート授業において、教員側と学生側で最も事情の異なった部分が「課題・レポート」であろう。教員は単位認定の必要上、出欠確認をある程度厳格に行わなければならない。ネット環境が学生個々で異なり、Wi-Fi 状態の不良やアクセス集中によるシステムダウンがしばしば発生する中で、40名以上の履修者がいる科目の担当者が Zoom 授業で出欠確認をすることは容易ではない。学生の顔出しを求めることは不適切とされる中で、仕方なく Zoom の挙手機能やチャットで出欠確認が試みられたが、手間がかかり授業の進行に支障が出たり、学生の中抜けなどをチェックすることは到底不可能であった。そのため教員側は止むを得ず毎回の課題やレポートの提出によって、授業への出席を認定する方法を取らざるを得なかった。

しかし、この状態を学生側からも見る余裕が当時の我々にはなかったのである。10科目以上履修していることが普通である学生にとっては、全科目で毎回何らかの課題やレポートが出されるため、一日中PC画面の前に張り付くような生活にならざるを得なくなったのである。資料配信オンデマンド型授業で行なった私の科目でも、毎回資料中の4つほどの設問に解答を求め、資料読後の感想を800字～400字で提出させていた。

自由記述には「全科目で毎回課題が出ると、一つ一つのレポートに割く時間や気力がおのずと少なくなってしまい、授業の理解度が低くなっているように思います。」「課題がどの教科も多くてなんとか提出することができるくらいで、一つ一つの授業を深く考えることがあまりできないと感じました。」という悲痛な声が多々見られた。実は、6月には全学教育推進機構が行なったアンケートで「遠隔授業で困ったことを選択」の回答に、「課題が多い」を選んだ数がずば抜けて多く、2回生以上では回答の42%がここに集中していたのである⁶。

授業で出される課題に対して、私のアンケートでは「すぐネットに頼って解答してしまった」という回答の多さが目立ち、私たちはこの実態を深刻に受け取らなければならない。課題の多さによって学生の学習傾向は、「授業で学ぶというより課題を期限までに提出することが中心になっている」と、所謂やつつけ仕事になっている者が多くなって行ったのである。多くの学生の課題解答はウィキペディアから引き写すことが大勢となり、最初の検索画面から2、3のサイトを閲覧してコピペしてくる学生も1/5ほどはいた。共通して言えることは、各サイトの運営者開設者を学生は全く吟味していないことと、書かれている記事を批判的に読めない（知らない事に対して最初に接した言説を鵜呑みにする）者が多いという点である。

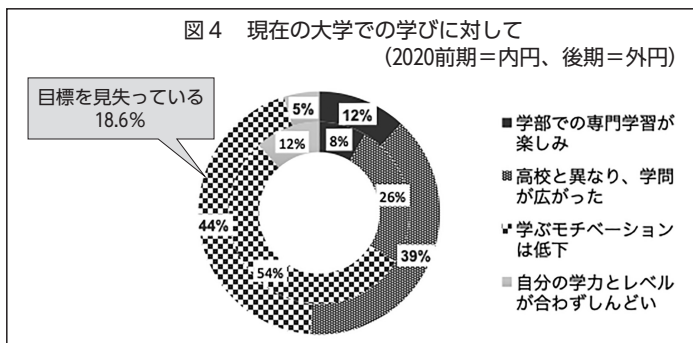
課題への回答を読んでいて危険に感じたことは、ネット上の歴史修正主義的解釈に読みの学生はいかに染まりやすいかということであった。この傾向は高校での日本史または世界史の履修経験と関係しているようである。どちらか1科目に対する知識しか身につけていないため、知らない分野に関する設問の答えを探そうとする時、サイトで歴史に対する恣意的な解釈に出会っても、その適否を判断できない学生がとて多くなっているのである。多すぎる課題の提出に追われる学生に対して、サイトの記事を読んでもしばし立ち止まって考える余裕を認めない大学の授業運営とは、適切なものであろうか。「外出できず図書館も使えない現状では、インターネットで調べるのが精一杯ですので、課題の答え合わせの際などに、どのようにして調べたら良かったのかを教えてもらえるとありがたいと思いました。」という要望も複数見られたことは、ささやかな救いであったが。

問題は、なぜこの6月時点で大学または学部は教員間で課題量の調整に当たらなかったのであろうかということである。教育効果を高めるために、現場において必要とされる調整を行うことは当然のことと考えるが、そのための教務的な会議や課題に関する申し合わせを図ろうという大学執行部や学部教員間での動きを、私は寡聞にして耳にしていない。公表済みのシラバス内容の変更とも関係するために躊躇されたとしても、事の軽重を考えれば前期途中での調整は遅きに失していない。「遠隔授業に関する調査が実施されたので、授業改善アンケートを全学的には行わないことにした」というFD委員会が、前期の授業を終えた8月に遠隔授業における現状の問題点を把握し、後期授業への改善点を明確にして発信しておれば、後期のリモート授業の質的な向上は一層進んだものと惜しまれてならない⁷。卑見ながら調整に最も大きな壁となったものは、学部縦割り型の大学組織にあり、本質的には大学教員が全体像を見ず、個々の授業や評価に対する独立性（自由）を優先したことにあったと考える。

4) 大学での学びに対するモチベーションについて

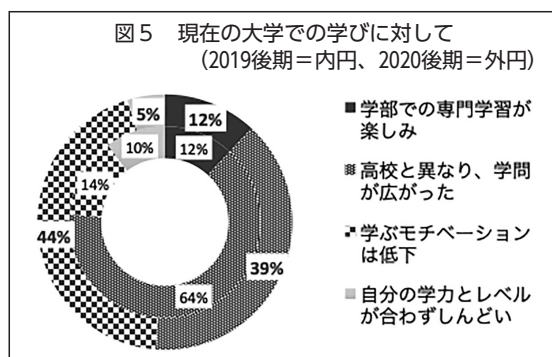
2020年度後期の終わりに、前期の100%リモート授業から対面授業が復活してきたことによって、コロナ禍の中での学生の学びはどのような状況にあるのかは私には気になっていた。後期15回の授業を終えて、対面授業での学生の様子から感覚的ではあるがコロナ前の2019年度後期より手応えに物足りなさを感じていた。そのため、授業アンケートでは「学ぶモチベーションが低下」という毎年の選択肢にもう一步踏み込んだ「現在目標を見失っている」を設け、集計では「学ぶモチベーションが低下」に加えて集計してみた。前期と比較した円グラフが下のものである（図4）。

後期から対面授業と登学が可能となった事



で、前期に相当低く出ていた学びへの満足度は1.5倍にアップしている。「学ぶモチベーションが低下」の率も10%ほど下がっているが、この44%の中に「現在目標を見失っている」と答えた者が半数を占めていた（全体の中では18.6%）。本学が学生の心のケアに対して「学生の未来センター」を早々に立ち上げたことはまさに時宜に適った対応である。前期と比べればこの数値は安堵できるものではあるが、前年度の同時期つまりコロナ禍以前の新入生後期の状況と比べた場合、この数値はどのような現状を表しているのであろうか。これが下の円グラフである（図5）。

一見してわかる通り、2019年度後期との顕著な差は、「高校と異なり、学問の世界が広がった」と感じている学生が昨年比6割に減少し、その分、学ぶモチベーションを低下させている学生が3倍近くに増えている点にある。これは「大学入学後の1年間で学ぶ楽しさを実感できないまま、後期を終えようとしている1年

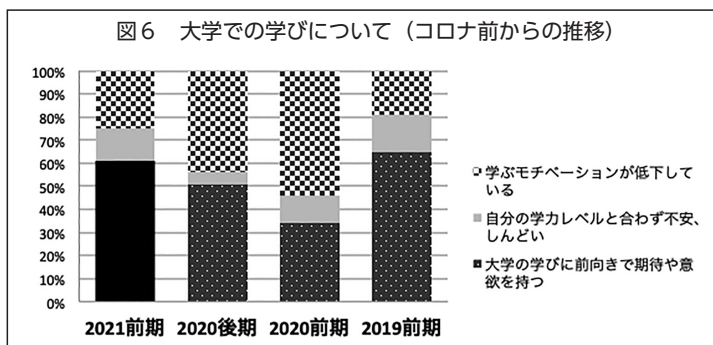


次生が多くいる」と解釈すべきものである。そして、「学ぶモチベーションは低下」と回答した44%に含まれている「目標を見失っている」と回答した18.6%は、コロナによる大学生生活の変化に打ちのめされた重症の1年次生と見なせば、本年度終了時の1年次生が持つ学びのモチベーションの輪郭が浮かび上がり、昨年度との大きな違いに説明がつく。先に成績概況の部分で述べたように、2020年度後期の私の科目受講生では、欠席超過者および成績不振者の比率が履修者の44%という数値を示し、例年の後期の数値の倍に達している状況は、このアンケート結果と同じ姿をしている。

5) 2021年度の入学生の現状

それでは、2021年本年度の新入生の前期末段階での実態はどのように現れてくるのであろうか。アンケートでは、授業形態に関しては「対面がいい41%（2020年度後期38%）・リモートがいい34%（30%）・どちらでもいい25%（32%）」という数値（前掲注5）であり、だいたいこのぐらいの比率が本学学生の一般的認識を表しているのであろうか。自由記述では「前半はリアルタイムで受講できていたが、後半になって時間が合わずリアルタイムで受講出来ずモチベーションが下がってしまった（複数）」「オンライン授業と対面授業があり、オンラインの方が楽しかったため気持ちが緩んでしまい、最後の方も講義にあまり出席できなかった。」「オンデマンドの時は少ししんどかったけど、対面にかわり精神的にも楽になりました。」と、対面授業またはリアルタイム Zoom 授業を肯定する声が散見する。

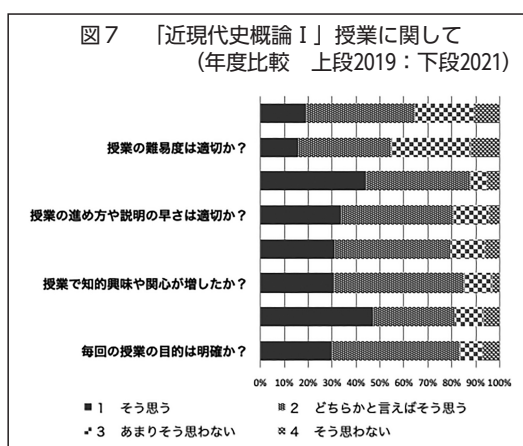
前期末時点での大学での学びに関するモチベーションは、図6の表のように一見するとコロナ前に戻っているような分布となっている。ところが、前述のとおり私の科目の成績では、欠席超過者と成績不振者の割合が2020年度後期とほぼ同じ数値をしめしており、かなり宜しくない状況を呈している。モチベーションに関する割合が類似している2021年度



前期と2019年度前期の授業内容に関するアンケートの集計値を比較することによって、2021年度入学生の特徴を探てみたい。

私の授業アンケートでは高大接続分野の科目として、新入生の大学適応度や教材の難易度、授業進度についての回答数を重要なデータと考えている。そこで、学ぶ意欲はコロナ前の入学生と同レベルにありながら、成績状況がその数値と乖離しているのは授業内容

に関する部分にあるのではないかと考え、コロナ前の2019年度前期と比較してみた。（図7）



2021年度の「授業の難易度の適切さ」に対するマイナス回答率の増加以外に目立った差は見られない。「授業の難易度が不適切」と回答した者が2021年度では45.2%と19年度より10%ほど多くなっている。

その理由を探るためにアンケートでは、予め4つの理由から選択して回答してもらっている⁸。毎年3割を占める「高校の内容と離れすぎて難しい」は、まさに高校地歴科での問題である暗記偏重の歴史の授業であったり、世界史必修化の中で行われている「世界史A」の授業内容が理解できていないという現状を表している。「高校で世界史を取っていなかったで、この科目の授業内容は知らないことばかりで難しかった。（複数意見）」という自由記述も毎年相当数ある。「世界史を高校の時に勉強していたが、近現代史概論は想像の倍以上にレベルが高いと感じました。」などの感想もあるが、本年度のアンケートでは難易度はこのままで良いという回答が57%であった。

今ひとつの理由「1回の授業での情報量が多過ぎる」については、大学の90分授業の密度に慣れてもらえないと考えている。これは高校の授業と大学の授業との質の違いである。私は入学生を甘やかすつもりはない。ただ、「パワーポイントの進むスピードが速く、メモが追いつかない時があった。そのため、パワーポイントを配布して欲しいと感じた。」という自由記述もある。リモート授業に切り替わって感じることは、教室での対面授

業のように学生の表情で理解度を確認する所作ができないため、授業のスピード（＝スライドの切り替え）が早くなりがちであった。これからは Zoom にある「反応やチャット」機能を使うタイミングを工夫して、スピードを調節したい。スライド資料の配布については、1年次生のうちにメモをとる習慣を身につけるよう指導しているため、安易に行わないことにしている。1年次科目を担当する者は、大学での4年間の学びに対する「躰け」ということも意識して、授業を行うべきであるというのが持論である。

授業に対する受講生の感想や前述のモチベーションの数値から考えれば、履修者の45%が欠席超過または成績不振となる事態に対しては、未だに妥当な説明が思い浮かばない。2021年度入学生は、高校3年生段階でコロナ禍の影響を強く受けたために、これまでの入学生よりも学力が低かったのであろうか。後期の受講生をよく見ながら実態の把握に努めたいが、20年度入学生と同様に、21年度の入学生もケアを必要とする学年であると考ええる。

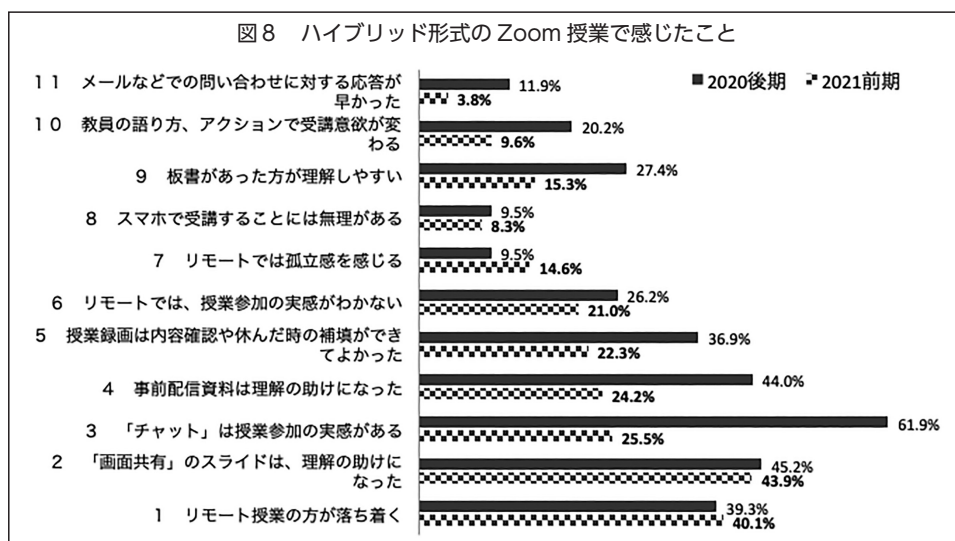
結びにかえて

コロナによる社会の変化は、従来から課題であったことがコロナ禍によってより顕在化したことが多いという指摘があり、大学教育においてはまさに然りである⁹。リモート授業のために ICT 機器の活用可否に迫られ、急遽キャンパスで大容量 LAN や学舎内に Wi-Fi の設備工事が始められた。リモート授業やそれを運用する LMS に対しては、教員側も学生側も経験値が低く、2020年度前期は大混乱の中でお互いが我慢や工夫をしながら終わった。そして、教員は余裕がないままに前期の少ない経験を頼りに微修正して、後期の授業を乗り切ったという感覚である。

本学では遠隔授業が始まって3週間ほど経った2020年5/29～6/11の期間に、前述のとおり WEB によるアンケートを全学教育推進機構が学生に対して行っている。授業開始3週間という時期の速さは評価すべきであり、1回生の回答率は64.6%とまずまずの値であったが、2回生以降の回答率が低く全学平均では38%と低調であったものの、学生の遠隔授業への取り組みと授業の運営状況を把握し、今後の運営とサポート体制の検討によりデータを提供している。そこではアンケートの目的が、全学的に遠隔授業の運営をサポートする体制の検討にウエイトが置かれていたためか、授業に関する質問は7つしか設けられず、授業への満足度・理解度・授業の分かりやすさ・課題とフィードバックの有無・自由記述という問い方であったため、授業への満足度も、Zoom 授業が円滑に進行しているか否かのレベルで回答されており、残念ながら授業改善に資する学生の声は拾えていない。

私の21年度前期授業アンケートの自由記述には「この授業に限ったことではありませんが、課題も多くて、一つ一つのレポートには時間が足りず、学びよりも何でもいいからとりあえずレポートを書いて提出して単位を取るということが目的となってしまっている気がします。」と自らの姿を冷静に反省する声があり、「zoom だろうと対面だろうと、チャットで授業に積極的に参加できるのは革新的だと感じたので、ぜひこれからも続けてほしい。」と、リモート授業に対する要望を率直に書き、直面している新環境の中で何とか学びを意味あるものにしたいと訴えている学生が多くいる。我々大学教員はこの2、3年の間に、今後常態化するであろうリモート授業に質的なスタンダードレベルを構築共有する時

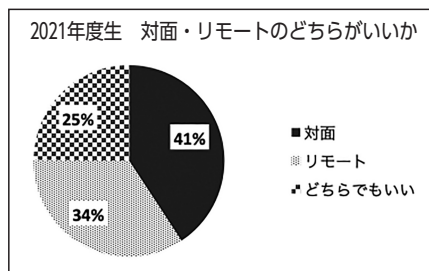
図8 ハイブリッド形式のZoom授業で感じたこと



期にあると考える。そのためにも、授業改善点の参考となる昨年度からの授業実践の記憶や学生の声（図8）を忘れ去ってはならない。

注)

- 共通教育のカリキュラムポリシーでは、「【高大接続分野】では、高校で学んできた教科科目から各学部教育への円滑な接続と、学部の専門分野を学ぶモチベーションを刺激することを目的とした、「大学であなたが伸びていくための科目」を提供します。文系学部では日本史・世界史を融合した近現代に関する基礎教養、および学部の専門分野で使う統計学の基礎を、理系学部では資格取得や国家試験に向けた化学・生物の基礎教養の演習等を取り入れた講義科目を提供します。」と記されている。
- 問い掛けの文例：「自由・平等・友愛」を合言葉とするフランス革命で誕生したフランス共和国は、カリブ海に植民地を持ち黒人奴隷を酷使していた。私はこの矛盾をどのように説明していたのか？設問例：1764年砂糖条例、1765年印紙条例、1773年茶条例の3つに共通する政策を見つけ、英国政府の北米植民地に対する政策がどう変化したのか説明せよ。「統制から□□に変化」
- 神戸大や関西学院大が、2021年度の4月に「20年度入学生の入学式」を行なっている。
- 私が独自に行なっている授業アンケートは後掲する。
- 「対面授業とリモート授業のどちらがいいか」という質問に対する21年度生の回答は、右の円グラフのようであった。リモート授業を望む大学生が30%前後となっている現実に対して、オンデマンド録画によって授業の復習や確認がしやすいという理由はもっともであるが、「あまり他人と直接やりとりするのが得意ではないので、正直なところオンライン授業になって安心してい



る。」「遠隔授業は誰にも会わなくて良いので授業を受けやすかった。」などの理由を記す学生も散見される。このような現状に対して、筑波大学医学医療系教授斎藤環氏からは学生が鍛えられる場の喪失という面で危惧する意見も出されている。(2021年8月18日毎日新聞「論点」)

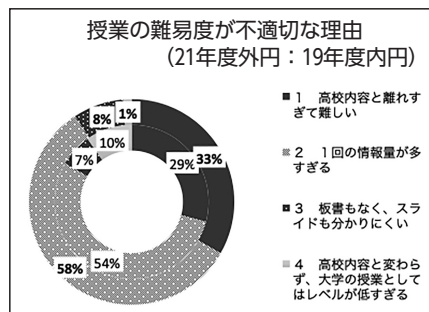
- 6 全学教育推進機構が行なったアンケートは、2020年度で3回、21年度は6月段階で1回行われている。

アンケート実施回	年次生	回答者%	「課題が多い」を回答した者	学修継続の不安者	コメント
2020年度第1回6月	1年	64.6	35.5%	45%	2年次生以上の回答率が低い
	2～4年	29.8	41.7%		
2020年度第2回8月	1年	62.9	65.0%	56%	「遠隔授業に対する困難で改善されなかったもの」という質問に対する回答として。
	2～4年	63.3	63.3%		
2020年度第3回10月	1年	40.7	40.7%	44%	
	2～4年	34.9	34.9%		
2021年度第1回6月	1年	70.2	41.8%	40%	20年度入学生のケアを追跡するためには、「2年次生」を別立てしなければならない。
	2～4年	30.1	42.5%		

- 7 当時のFD委員会の第3回議事録によれば、「2020年度前期授業アンケートは従来の紙媒体での授業科目別のアンケートは実施せず、遠隔授業（オンライン授業）に関する調査を引き続き前期末に行う。」として、全学教育推進機構が行う調査を継続することで学生の動向を把握できると考え、2020年度前期授業アンケートを実施しないと決定した。

全学教育推進機構が行なったアンケートの授業関係の設問は、理解度・満足度を「普通」を含む5つの選択肢から選ばせている。また、設問7「遠隔授業で困っていることがあれば」、設問8「隔授業で良かったことがあれば」では、授業改善に結びつきそのような選択肢が「教材が分かりにくいかな否か」のみであり、およそFDが求めるデータを得ることはできない。したがって、当時のFD委員会の判断には首肯しかねる。

- 8 授業難易度が不適切についての他の理由と19年度前期との比較は、右図のとおり。
- 9 例えば、20年5月2日毎日新聞朝刊 伊藤智永(専門記者)「コロナに教えられること」には、「思えばコロナ危機下の異世界は、感染爆発の前からあった変化を濃密に増幅させたに過ぎない。」と説いている。



資料：2020年度後期 授業アンケート

本年度はコロナ禍により前期授業を授業資料（A4用紙7枚程度）の作成配信で行い、後期授業は、履修者を隔週で分けた対面&リアルタイム Zoom のハイブリッド方式で行いました。対面での授業とリアルタイム Zoom 授業について回答して下さい。（事情によって全てリモート参加の人は、「8」を省略して Zoom 授業での回答を記して下さい。）

次年度の授業改善に備えるためのものです、どうかアンケートへの協力をお願いします。

1 あなたの所属する学部はどこですか。

- ①法 ②経済 ③経営 ④人文 ⑤心理 ⑥グローバルコミュニケーション
⑦現代社会 ⑧総合リハビリテーション ⑨栄養 ⑩薬

2 前期の授業内容を振り返って、あなたの授業満足度について、あてはまるものを全て選んでください。（満足度の低かった人は、⑧にその理由を記して下さい。）

- ①この科目は、学部の専門科目への「導入」「基礎固め」となる内容で受講して良かった
②講義計画は、シラバスの内容と概ね一致していて安心感があった
③毎回の振り返り提出は、表現力や文章力をつける為のトレーニングになった
④プレゼン課題は、フィードバックもしっかりとあり、よい経験となった
⑤毎回のスライド画面が見やすく、講義の流れともマッチして理解を助けてくれた
⑥教員の説明の仕方、語り方が分かりやすく、概ね90分間集中できた
⑦授業によって、自主的にサイト検索や図書館で学びを深めたことが多かった
⑧満足度は低い

3 現在のあなたは大学での学びについて、どのように感じていますか。

（最もあてはまるもの1つを選んでください）

- ①対面授業に切り替わり、大学での授業が楽しみである
②高校までとは異なる学びが体験できて、学問の世界が広がった
③授業の充実感が得られず、学びのモチベーションが低下している
④自分の学力と授業のレベルが合わず、ついていけないので不安である
⑤あまり大学にも行けず、目標を見失っている感じがする

4 前期で苦労した「課題の多さ」について、後期はあなたの状況が変わりましたか。

- ①課題量が減った ②課題量は増えた ③ほとんど変わっていない

5 前期のあなたが受講した全科目を振り返って、対面とリモートとでは、あなたはどちらの形式の方がよいですか。

- ①対面 ②リモート ③どちらでもよい

*以下は、この科目の授業の進め方と内容について回答してください。

6 事前に配信された資料は、どのように参照して授業を受けましたか。

- ①プリントアウトして手元に持っていた
②ダウンロードしたものをスマホやタブレットで見ながら受けた
③授業前にチェックしたのみで、授業時には見ていない
④資料をチェックしなかった

7 ハイブリッド形式の Zoom 授業を受講して、あなたが感じたことを選んで下さい。

（あてはまるものを全て選んでください）

- ①リモートで授業を受けている時は孤立感を感じる
②リモートで授業を受けている方が落ち着いて受けることができた
③リモートではパソコン画面を見つめるのみになり、授業に参加している実感がわからない
④「画面共有」の途中で教員が講義する画面もあった方がいい
⑤「チャット」をもっと活用すれば、双方向授業が充実すると思った
⑥「チャット」は授業参加できてよかった
⑦「画面共有」で映されるスライドは、見やすく理解の助けになった
⑧事前配信資料があると授業が分かりやすかった
⑨スマホで受講することには無理があると感じた
⑩教室での受講生とリモートの受講生に、一体感を持たせようとする教員の姿勢は良かった
⑪ Zoom の授業録画があるので、授業内容の確認や休んだ時の補填ができてよかった
⑫ メールやコースフィールドでの問い合わせに対する応答が早かった

8 ハイブリッド形式の対面授業を受講して、あなたが感じたことを選んで下さい。

(あてはまるものを全て選んでください)

- ①教室が受講者数に比して広すぎて、かえって落ち着かなかった
- ②プロジェクターの画面投影が、狭く見にくい教室があった
- ③dot campusでの課題提出によって、出席確認と成績評価をするのは明確でよい
- ④1限や5限の授業は、他の時限よりも出席し難い
- ⑤対面授業とZoom授業の両方を学内で受けられる環境を強く希望する
- ⑥「投票」や「チャット」機能は、教室でも参加できるようにしてほしい
- ⑦教員の語り方、授業中のアクションで授業を聞こうという意欲が変わったと思った
- ⑧板書があった方が理解しやすい

9 (この科目では) 教室 & Zoom 授業を受講して、どちらの授業の方がよかったですか。

- ①リモートでZoom授業を受けている方がよい
- ②教室で対面授業を受けている方がよい
- ③どちらも自分にとってはあまり変わらない

10 毎回の授業の目的は、はっきりしていましたか。

- ①そう思わない ②あまりそう思わない ③どちらかと言えばそう思う ④そう思う

11 授業を受けることで知的興味や関心が増しましたか。

- ①そう思わない ②あまりそう思わない ③どちらかと言えばそう思う ④そう思う

12 授業の進め方や説明の早さは適切でしたか。

- ①そう思わない ②あまりそう思わない ③どちらかと言えばそう思う ④そう思う

13 授業の難易度は自分にとって適切なものでしたか。

- ①そう思わない ②あまりそう思わない ③どちらかと言えばそう思う ④そう思う

14 上で①②を選んだ人は答えてください。

- ①高校での内容から離れすぎて難しい
- ②1回の授業での情報量が多すぎる
- ③高校内容と変わらず、大学の授業としてはレベルが低すぎる
- ④板書もなく、スライドや資料も分かりにくい

15 あなたの出席状況は良かったですか。

- ①あまり出席していない ②欠席は3, 4回 ③欠席は1, 2回 ④全て出席

16 あなたは授業を意欲的に受けましたか。

- ①そう思わない ②あまりそう思わない ③どちらかと言えばそう思う ④そう思う

17 講義を聴きながら (Zoom で視聴しながら)、メモをすることはできましたか。

- ①できなかった ②あまりできなかった ③どちらかと言えばできた ④よくできた

18 授業の後に、図書館やネット等で自発的に深掘りした事がありましたか。

- ①全くできなかった ②あまりできなかった ③半分以上できた ④ほぼ毎回できた

自由記述欄…この授業に対する感想等

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございます。